

自分の力で“伝える”経験を豊かに 東京都教育委員会 「外国語に触れる機会の創出」事業

東京都教育委員会は2023年9月より、児童の英語でのコミュニケーション能力の向上と国際理解教育を推進する「外国語に触れる機会の創出」事業を開始しました。ネイティブ人材を活用した「イングリッシュ・ウィーク」「イングリッシュ・キャラバン」の実施をとおして、児童が学校生活の中でネイティブ人材と自然なやり取りをする様子が見られています。

英語力向上はALT活用と授業以外の交流がカギ

外国語指導助手（ALT）をはじめとする英語に堪能なネイティブ人材は、児童生徒の英語力向上のカギとなる存在です。文部科学省の「令和4年度『英語教育実施状況調査』概要」では、CEFR B1(英検2級)レベル相当以上の英語力を有する生徒の割合が高い高校では、ICTを活用した言語活動やALTによる授業外の活動を行っている学校が高い割合でみられる、という分析がなされています。文部科学省は「生徒の英語による言語活動を増やすこと、言語活動の取り組みでICTやALTを効果的に活用すること、教師が英語力を高め授業で積極的に英語を使用することなどが、生徒の英語力の向上に必要」と取り組み強化を呼び掛けています。

一方で小・中・高等学校を通じ、ALTは幅広い活動に参画しているものの「英語の授業以外での児童生徒との交流は、一層の活用の余地がある。」と課題点も指摘。授業だけでなく、様々な場面でALTと児童生徒がふれあう機会を作るよう改善を求めました。

子どもたちがネイティブ人材と 触れ合う時間と場を作る

東京都教育委員会の「外国語に触れる機会の創出」事

業は、英語が堪能なネイティブ人材が小学校を訪問し、児童とともに授業に参加したり休み時間や放課後に遊んだりする中で、英語によるやり取りを通じて、児童の英語で発信する力を向上させることを目指すものです。2023年9月からスタートし、2024年3月までに約300の都内公立小学校で実施予定です。

本事業を実施することになった経緯について、同教育委員会義務教育指導課では次のように述べています。

「東京都では、これまで様々なグローバル人材育成に向けた取り組みを行ってきました。本事業では、普段生活している学習環境の中に、英語を話す外国の大人の方がいる、また、思わず取り組んでみたくなる活動が目の前にある、という環境を作り出すことで、子どもたちには、これまで外国語活動や外国語の授業で学んだ内容やジェスチャーなどを駆使し、自分の力で伝える経験をしてもらいたい。そして、さらに伝えたいという気持ちや、今後の外国語活動や外国語の授業に対する意識を高めてもらいたい」と思い、この事業を企画しました。

本事業は「イングリッシュ・ウィーク」と「イングリッシュ・キャラバン」の2つの形態で実施しています。「イングリッシュ・ウィーク」は、1週間にわたりネイティブ人材1名が学校を訪問します。「イングリッシュ・キャラバン」は、

5名のネイティブ人材が1日学校を訪問します。学校が、授業や学校行事等の実情に合わせて選べるよう、2つの形態を用意し、いずれかを選択してもらっています。また、学校が、子どもたちに体験させたいプログラムを選択できるよう、プログラムを複数用意しています。」(義務教育指導課)



給食やクラブ活動、外国語以外の教科で交流

ネイティブ人材5名が1日学校を訪問する「イングリッシュ・キャラバン」では21のプログラムを準備しました。例えば「授業内で実施するプログラム」としては、ネイティブ人材が出身国等の紹介やクイズを出してやり取りする「ワールド・ツアーへ出かけよう!」や、英語の絵本の読み聞かせをする「外国の絵本に親しもう!」などがあります。また、「授業外の活動に関するプログラム」としては、訪問したネイティブ人材とフリー・トークができる「イングリッシュ・カフェ」などを設けました。他にも「クラブ活動・委員会活動等に関するプログラム」など、授業以外の交流の場を数多く設けました。

1週間にわたり1名のネイティブ人材が訪問する「イングリッシュ・ウィーク」では31のプログラムを準備しました。キャラバンと同様の授業外のプログラムに加えて、「一緒に書写(毛筆)を楽しもう!」(国語)や「一緒に体を動かそう!」(体育)など、外国語以外の授業にもネイティブ人材が参加し、児童と一緒に活動できる形を取りました。

「プログラムの内容は、実際に行われる活動を想定し、児童がどのような内容を、どのような言葉で伝えようとするか。また、自分から話し掛けることのためにちがちな児童に、場面や発達段階に応じて、ネイティブ人材がどのように話し掛けることがよいかといったことを想定し、企画

していきました。」(義務教育指導課)

プログラム作成にあたっては、東京都教育委員会の担当者とインタラクティブ東京支店が協力して行い、小学校に提示したプログラム一覧には、対象学年や参加可能人数、活動場所や所要時間、必要な用具、プログラムの流れ、想定される英語の表現例などを紹介。学校側が選びやすいように工夫しました。

また、小学校を訪問するネイティブ人材は、今回の事業のために弊社が独自に採用。日本人コーディネーターとともに小学校を訪問しています。「イングリッシュ・ウィーク」、「イングリッシュ・キャラバン」は、毎日7、8校で同時に実施されており、弊社ではこれまでのALT派遣事業の経験を活かし、スムーズな運営を心掛けています。

「もっと英語で話せるようになりたい」

外国語や外国語活動の授業だけでなく、日常の学校生活の中でネイティブ人材との接点を持てたことは児童にとって新鮮で、「伝えたい」気持ちを高める効果があったようです。

「実施した小学校からは、『児童が今まで以上にたくさんの英語に触れ、考え、聞こう、話そうとしている姿がありました』という声や、『英語が伝わったことを喜び、もっと英語で話せるようになりたいと感じた児童が多かったです』といった声を聞いています。試行錯誤しながらも、これまでの授業で学んだ英語を使い、実際の学校生活の中でやり取りできた体験が、子どもたちの中に刺激を与えているものと捉えています。」(義務教育指導課)

このほかにも、新しいタイプの体験型英語学習施設「TOKYO GLOBAL GATEWAY」の設置や、英語動画教材「TokyoGlobalStudio」の公開、中学校各学年における英語スピーキングテストの実施など、小・中・高を通じたグローバル人材の育成に力を入れる同教育委員会。本事業の目指すゴールを次のように考えています。

「子どもたちには、英語を通じたコミュニケーションの楽しさや喜びを味わってもらい、英語への関心や意欲を高め、今後の小学校や中学校の英語学習に主体的に取り組んでいこうとする意識や態度を養ってもらいたいと思っています。これらのことが、中学校、高等学校での英語学習の土台となり、子どもたちには、将来、豊かに英語を使いこなせる力を身に付けてほしいと考えています。」(義務教育指導課)

先生と共に授業を創り上げるパートナー ALTを対象にした学習指導要領の理解と実践研修 静岡県教育委員会

ALTが学級担任や英語科教員とタッグを組み、よりよい英語の授業を展開するには、学習指導要領を理解し、実践に活かすマインドとスキルが求められます。静岡県教育委員会では県内のALTを対象とした資質向上研修に、リンク・インタラックの研修パッケージ「ALT基礎力テスト(TICA)」を採用し、県内の外国語教育のレベルアップを目指しています。

ALTに学習指導要領の理解が不可欠な理由

子どもたちが未来に生きる「資質・能力」を身に付けるためには、それぞれの先生が、学習指導要領が掲げる各教科の目標や目指す「資質・能力」を理解していることが欠かせません。学習指導要領に基づいて編成された教育課程のもと、単元を構想し指導計画を立てていくことは、学校の先生方にとっては当たり前のことですが、すべてのALTがこうした認識を持っているとは限りません。

そのため、これまでALTが学習指導要領を読み込み、目標やねらいを理解して授業に活かすことは容易ではありませんでした。学習指導要領の英訳版(仮訳)は文部科学省が公開しているものの、いわゆる「解説編」や、各種の解説書などは英訳されたものがほとんどなかったからです。また、ALTの資質・能力向上は各自治体に委ねられているのが実情で、配置したALTに対して、求められる役割の理解や、学習指導要領の理解にまで踏み込んだ研修は「やりたくても難しい」と考えられてきました。

そこで、弊社は2022年にALTへの研修パッケージ「ALT基礎力テスト(TICA)」を開発。全国の自治体への活用を呼び掛けています。ALT基礎力テストはALTと直接関わる先生方の声をもとに、ALTに求められる「姿勢」と「知識」が身につけているかを判定するテストです。テスト前には「役割理解」「規範遵守」「教育目標」「指導計画」などの8コースの英語での研修プログラムがあり、ALTは受講の前後で効果測定としてテストを受けます。合格基準に達すれば日本の学校でALTとして業務にあたるミニマムな規準を満たしていることが証明され、現場の先生方は安心してALTと授業を作り上げることができます。

任用形態を超え90人のALT研修を実施

静岡県教育委員会は今年度、ALT基礎力テストを活用した県内ALTの指導力向上研修を実施しています。同県は児童生徒が国際社会の中で積極的に多様な人々や文化に触れながら故郷・静岡の魅力を再認識するとともに、世界に発信できるような力を育むことを願って、静岡型の英語教育を展開しています。今年度、新しくできたALT研修パッケージ「ALT基礎力テスト」を導入しています。

その理由を静岡県教育委員会 義務教育課 指導班の指導主事 渡部 彰 先生は、次のように語ります。

「教育委員会所属ALTについては任用形態、研修体制が異なるので、小さい自治体では、単独で研修会を組んだり、オールイングリッシュで研修会を実施したりすることが難しいという部分があります。そのため、静岡県全体のALTの資質向上をめざして、県主導で研修会を行っていくことが重要であると考えています。



第1回目の研修の様子

また、ALT同士も横のつながりがなく、どんな指導が求められているかが分からないままにいるALTが少なくありません。今回、ALTの研修会と基礎力テストを通して日本の英語教育について理解を深めてもらえればと思い研修を企画しました」。

研修対象は県内の小・中学校に配置されているALT約90人。5月～12月までの約8カ月間に渡って計画し、対面での集合研修で4エリアに分けて実施しました。

集合型の研修は2回。6月～7月中旬の第1回研修は「理解」を中心とした講義を行いました。テーマは「学習指導要領と英語教育への理解」、4技能5領域の目標、言語活動の概要と効果のレクチャー、デモレッスン参観などです。11～12月の第2回研修は「実践」で、「幅広い指導方法の実践」がテーマです。子どもの発話を促す言語活動案の作成や、ICT活用例の紹介を取り入れる予定です。

1回目と2回目の研修の前後には基礎力テストを実施し、研修の効果を測定します。また、希望するALTには弊社のALTを指導する「トレーナー」による授業視察を取り入れました。



第1回目研修の様子 (アクティビティ)

難しいトピックも分かりやすく伝わった
希望者には授業視察と助言も

「第1回の研修においては、学習指導要領の内容理解を

中心に講演を依頼しました。その概念を、多様な価値観を持つALTに教えることは、非常に難しいことと考えていましたが、対面の研修で模擬授業も取り入れ、ALTが生徒の気持ちになってやってみるということが、ALTにとっては非常に良かったのではないかと感じています。

また、授業視察はALTたちにとって指導の助けになったのではないかと思います。授業を見て評価してもらう機会になかなか恵まれないので、アドバイスをもらい、改善点を指摘してもらえたのは良かったと思います。チームティーチングの在り方についても、アドバイスをいただけたのが有益でした」(指導主事 渡部 彰 先生)

1回目の研修を終えたALTからは、「授業にもっと言語活動を取り入れ、生徒が、英語で話しながら参加できる方法を学べた」「生徒を自律的な学習に導く技術を学んだ」「生徒や教員との信頼関係を築く方法を知った」「生徒が楽しみながら(授業に)参加できる方法を学んだ」「英語指導の経験が少ない教員に、どのように授業に関わってもらえるかを学んだ。授業の構造についても学んだので試してみたい」などと、授業づくりに役立つ研修経験ができた喜びが伝わってきました。

研修後のアンケートを見ると、授業ですぐに使えるアクティビティや教材など実践的なものを求めている様子も分かってきました。こうしたニーズが把握できるのも、主催する教育委員会側のメリットになります。研修は現在、第2回目が各地で進行中です。ALT基礎力テストの結果や研修前後のALTの変容は最終報告の形でまとめ、次年度に活かしていく予定だといいます。

「多様な価値観、考え方を伝える活動にALTは貴重な人材です。小・中学校の指導体制の構築、教職員の資質向上に努める中で、ALTの資質向上研修は1つの柱と考えています。第2回目の研修では、ALTも納得し、授業で使いたい、やってみたいと思えるような、子どもたちの力を伸ばす指導法、教授法、実践を期待しています。そして、これまで以上にALTと教員とがチームワークを高め、よりよい英語の授業を作り上げることを願っています」(指導主事 渡部 彰 先生)